

---

# 海の夢

伴美砂都

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

海の夢

### 【Nコード】

N9176S

### 【作者名】

伴美砂都

### 【あらすじ】

工業地帯と港の近く、いつも曇天の海沿いの町で育った三人の少女のお話です。感受性故に傷ついて、思いやる故にすれ違う。私たちは、いつ大人になるのだろうか。

## 海の夢

本屋の床がぬかるんでいた。

潮の匂いがした。

私の欲しい雑誌はいつまでも見つからなくて、地面の段ボール箱に貧相に積まれた子供用の折り紙のくしゃくしゃになったビニールに嫌気がさしていたら、あなたはそれを買うと言って笑った。

飽きた私は「ゆみちゃん」にラーメンを食べに行こうと言い、あなたは自転車に乗って走り出した。

私を置いて。

目が覚めたら泣いていた。

潮の匂いがした。

遠くからゴウン、ゴウン、ゴウンと工場の音が聞こえて、私はベッドに体育座りで抱え込んだ膝に頬を付ける。

海と工場しかないこの町では涙も同じ匂いで、うまく区別がつかない。

一両しかない電車がガタガタと線路を鳴らして止まり、私は解放される。

三月の初めの昼下がり、冷たい風と温い日差し。駅長しかいない駅の駅長に定期券を見せたら、いっつも敬礼が返ってくる。

ホームとほったて小屋みたいな駅を通り抜けて、家路を急がない私は、海へ向かう。

「りんちゃんどこ歩いてんの」

昨夜聞けなかった声に振り向くと、着崩した学生服に赤いマフラーが見えた。

「私の通学路だもん、ここ」

歩いていた堤防の上から言うと、彼はふうん、と言ってにやりと笑った。

してやったり、と私は澄まして前を向く。作り笑いをしない彼の笑顔はレアだ。

「あんたは何してたの」

「りんちゃんのストーカー」

「は？」

「うっそ、散歩、というか寄り道、というか暇っす」

「あ、そう」

2時間目ぐらいにやっと戻った現実が、ぼんやりと濃くなる。

「イッタ、」

「ゆみちゃん」にラーメンを食べに行こうよ、と私は言う。

自転車を引いて歩いていたら彼はいいよ、と言って歩みを止め、私は道路と海を隔てる高さ一メートル三十センチの壁から飛び降りる。

気づくのは、私はあなたを笑わせたい。できるだけ多く。

視界の端でテトラポットが揺れた。

住宅地と工場地帯のちょうど境目ぐらいにある「ゆみちゃん」は、工場で働く人の休憩時間と夜だけ混んでいて、あとの時間は空いている。

引き戸を引くと、湯気と豚骨の匂いがする。

「らっしやい」

筋肉質のおじちゃんと恰幅のいいおばちゃんが二人で経営している「ゆみちゃん」は、私が生まれる前からやっているらしい。

おじちゃんとおばちゃんは本当に仲が良く、いつも二人してがっはっはっ、と笑っている。

なんで「ゆみちゃん」なの、と訊いても答えてくれないおじちゃん、おばちゃんのことを「みっちゃん」と呼ぶ。

おばちゃんの名前は「みっこ」というらしい。

「おじちゃん、スペシャル2つね」

イッタが言うつと厨房からへいよー、と威勢のいい声が帰ってくる。豚骨スープにメンマ、ナルト、味付けタマゴと海苔ののったラーメンはおじちゃんに言わせると単なる豚骨ラーメンではなく、「ゆみちゃんスペシャル」なのだそうだ。

今の時期、受験生の合格祈願とかでナルトには「合格」の二文字が入っている。

おばちゃん慣れた手つきでそれを薄切りにしていく。

駅と反対側にあるこの店には学生の客はあんまり来ないから、この時期工場で働く人たちが「ゆみちゃんスペシャル」を頼んでも強制的にナルトは「合格」になる。

「太くん久しぶりじゃない、受験の方はどんな感じなの」

「や、おかげさまつす」

イッタの返答に私は吹き出す。

「なにそれ」

「・・・」

「あら、そうなの、高校はどこ？」

「や、専門つす」

「あらまあ、そうだったの、おめでとう」

にこにこ答えるおばちゃんに、イッタはどもつす、と短く会釈する。

どうやら、最初の返事は「おかげさまで、合格しました。ありがとうございます」とかなんとか言いたかったらしい。私はおかしくなつて、くすくすと笑う。

「りんちゃんはどうか、受験のほうは」

「あ、私も、おかげさまつす」

言つと、おばちゃんのはがっはっはつ、と笑つてあらあら、おめでたいわねえとナルトを三割増しの厚切りにした。

へいお待ち、とおじちゃんが言つて、私たちはしばらく黙つたまま三割増しのナルトが乗つたラーメンをすすする。

二月の初めに、私は電車で約四十分の公立高校に、イッタは都心の専門学校に合格通知をもらった。

今年は私やイッタ以外にも推薦入試とか専門の子がけっこう多かつたらしく、教室の中は半分受験シーズンの終わったような雰囲気を漂わせている。

公立高校の一般入試を控えている子も滑り止めの私立には受かつたりしてるから、少なくともうちのクラスにはあまりピリピリした雰囲気はない。先生たちも「気楽にやれよ」なんて、リラックスしたもんだ。

そして受験勉強を名目に家にこもる必要のない私たちは、短縮授業の午後をいい具合に持て余している。

「美紅は？」

「ゆみちゃんスペシャル」を食べ終わつて私が言つと、おばちゃんは黙つて上を指さした。

行つていい、と訊くといいわよ、と返つてきたので、私はおばちゃんにお金を渡して厨房の横の階段を上がる。

店の二階がおばちゃんたちの自宅になっていて、突き当たりに美紅の部屋がある。

美紅は小さいころから中学一年の途中まで私とずっと一緒にいて、

中学一年の秋から引きこもりになった。

なぜかは知らないけれど、夏休みが終わって一緒に学校に行こうとしたら部屋から出てこなくなっていた。

そんなわけで、私は週一でゆみちゃん、つまり美紅の家に通う。

美紅の部屋は和室で、春夏は寒く秋冬は暑い。

ドアを開けると換気されないまま効き過ぎた暖房のむっとした臭いがする。

「みーくー」

部屋の奥に向かって呼びかけると、毛布の塊がもそつと動いた。

「ういつす、元気？」

やっぱり美紅は何も答えない。私は閉めたドアに凭れてしばらく返事を待つ。

十五分ぐらいぼーつとしていると、暖かすぎる室温にも慣れてくるから不思議だ。

こおお、とエアコンの音が聞こえて、少しだけ眠くなる。毛布の塊がまた小さく動いた。

「・・・美紅、寒いのか？」

返事はない。

「じゃあね、またくるね」

そう言っただけで部屋を出ると、廊下が寒かった。



海水に浸食された跡に平野のできたこの土地では、「潮平」という名字が少なくない。

「潮」とか「海」とかの字がつくのは昔から住んでいる「ウチ」の人、それ以外の名字の人は「ソト」の人、といって、昔は派閥争いみたいなものもあったらしい。

まあ私たちの世代には関係ないことだ。海に近い町内の中学校を「ウチ中」、市街地の方を「ソト中」と呼んだのも昔の話で、私たちが小学校を卒業する年の初めに「ウチ中」は廃校になった。

おかげで電車通学になって学生ばかりの満員電車に辟易する以外は、別になにも変わらない。

おじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃんの代からこの土地に住んでいると言い張るうちの父親は、この土地には腐るほどいる潮平の名字をもつて生まれてきた私に、輪廻、というおよそ常識では考えられない名前を付けた。

小学校高学年か中学校一年の頃だけに自分の名前の由来を調べるとかいう宿題があつて、父親に尋ねたところ「名字がありきたりなので名前は覚えやすいように変わったものにしたんだ」と自信満々に答えられ、それはそうだけどこの名字が多いのはこの町だけじゃないかと反論したところ寝たふりをされたので、グレて家出でもしてやろうかと思つたがめんどくさかつたのでやめた。

そのときは美紅もあたしの名前には意味がない、と言ってずいぶん元気をなくしていたっけ。

それから変わった名前だね、と言われたときは見りゃわかるけど輪廻転生の輪廻、生まれ変わるように、とか、ほら、来世でいいことあるように、とかでたらめに答えるようにしている。

ただ、私は来るかわからない来世より今がいい。

たった狭い世界に生きている今。悪いにしても、たかが知れている。

おじちゃんとおばちゃんに挨拶をして外に出ると、まだ日はあるというのにさつきよりだいぶ風が冷たくなっていた。

引き戸を引くとすぐ堤防の向こう、海が見える。

海からの風は山にぶつかって、ひゅう、と鳴る。

イッタは店のちょうど向かいの堤防の上に座っていて、私と目が合うと、よっ、と言って手を挙げた。

「寒くない？」

手を挙げ返して言うと、イッタはそうねー、と言って赤いマフラーを巻き直した。

待たせてごめん、と言うと、いいよ、と返ってくる。

こういうとき、うん、だけじゃなくて、いいよ、と返すところが、イッタは律義だ。

そのまま、私たちは駅前まで歩いて戻って本屋に入った。

緩やかに現実逃避したいとき、私はファッション雑誌を買う。カラフルな紙面には、実在するけど実在しない理想の女の子の像が溢れている。

このへんじゃ珍しく大きな本屋の自動ドアが入ってすぐ、女性誌のコーナーで私の欲しい雑誌はすぐに見付かった。

「暇だな、俺らも」

音楽雑誌のコーナーでしばらく立ち読みしていたイッタが寄ってきて言う。

いいじゃない、春は非日常に浸りたくなるの、と私は答える。この猶予期間はいつまでも続かない、と。

まーそうだけどね、とイッタは言って右手に持っていたロックン・オン・ジャパンをファッション誌の平台に載せた。

「折り紙・・・」

「ん？」

「うっん、なんでもない」

「折り紙欲しいの？」

「欲しくない」

「・・・」

「ねえイッタ、海行こうよ」

「またっすか」

「だめっすか」

「いいっすよ」

そうして私たちは暮れかけた海沿いをまた歩き、テトラポットの上に乗って沖を見る。

イッタはひよいひよいと隙間を越えてその上を渡っていく。

海鳴り。

そう呟くと、聞こえたのか顔を上げた。

「ねえイッタ」

「なに」

「海、好き？」

「普通っす」

「ふうん」

「りんちゃんは？」

「わかんねえっす」

割れたコンクリートのかけらをイッタが海に放る。  
かつん、と仲間にぶつかって、それは塩水に落ちた。

「なんか、お腹減った」

「まだ食うんすか」

「うるさいな、家帰ったら夕ご飯なの」

「あ、俺もだ」

ポケットから鍵を取り出して家のドアを開けると、石油ストーブと醤油の匂いがした。

プライバシー第一の我が家では誰も電気ストーブ点けておいてやるうなんて考えないから私の部屋のフローリングは冷たいままで、殺風景な床には朝のまま、いや昨日、いやそれよりもっと前のまま、捨てられないものがいくつかが転がっている。

たとえば死んだ猫の首輪とか初めて買った黒のマニキュアの瓶とか、三年前春の学校で美紅と撮った写真とか。

鞆に教科書をばいばいと放り込んで簡単に明日の支度を済ませ階下に降りると、おばあちゃんに会った。

おやおやりんちゃん、遅くまでお疲れさま、と言うおばあちゃんに、遊んでただけだねー、と言ってにやつと笑ってみる。

イッタを知らないおばあちゃんに、イッタに似せた笑いを見せる。それを知らないおばあちゃんは何事もなく、まあまあ、若いうちは遊ばんとねー、などと言って居間に戻っていく。

お腹減った、と私が言うともうすぐご飯だよ、と後ろ姿から返事が聞こえた。

天然ボケのおばあちゃんと放任主義のお母さんと地味な女子高生のお姉ちゃん、女四人の食卓はなんとなく気まずい。だけとおばあちゃん大量に作った煮物は美味しい。

うちはお父さんがガリガリでお母さんが普通でおばあちゃんとお姉ちゃんがぼつちやりで、私は幸いなのかどうなのかどれだけ食べても太らないらしい。

おかげで私は毎週、とんこつたっぷりの「ゆみちゃんスペシャル」を残さず食べることができる。

高校生ぐらいになったら太るよ、と言われるのだが、そうしたらその時考えればいい。

お姉ちゃんみたいに毎日やつきになつて腹筋とかするのも今はめんどくさいと思つただけで、やりたいときにやればいい。

ある日、そういう適当なスタンスで生きる私のことをお姉ちゃんがめちやくちやに嫌いだつてことを知ってから、ますますそういう適当なスタンスで生きるのが私の毎日の課題になつた。

それはたまに投げ出したくなるけど、たいていのことはゆるーく、ただ流れていく。これはこれで幸せなのだ。

私は黙つてテレビを見ながら、よく煮えたタケノコを口に放り込む。テーブルに飛んだ煮物の汁を神経質にティッシュで拭くお姉ちゃんを見ないふりして、おばあちゃんとスマップの話題で盛り上がる。

椎名林檎が好きな私はスマップは別にどうでもいいけど、おばあちゃんにはクサナギくんが好きらしい。

おばあちゃん、修二と彰知つてる？と訊くと、知ってる知ってる、とおばあちゃんはにこにこ笑つてテレビに出ている関ジャニエイトを指さす。

ジャニーズは嫌い、とお姉ちゃんが吐き捨てた。

卒業式の日、どうしようもないぐらいの曇天だった。

雲が重くて、雨が雪でも降りそうなくせに降らなくて、吐く息の白が濃い。

寒い体育館で「仰げば尊し」を合唱しながら、私は海が見たくて仕方なくなった。

体育館のあちらこちらから鼻をすする音が聞こえていたけれど、私は泣かなかつた。

ただ、式とホームルームが終わつて挨拶を済ますと、ひどく力が抜けた。

美紅のぶんの卒業証書は、教室でこっそり私が受け取った。

「なんかすっごい解放感、というか脱力感」

「なにそれ」

「なんだろうね」

「うーん、あたしは卒業寂しいのもあるし、高校どんなだろうってのも今から不安だけどねー」

「ふーん」

まだ、なのかどうか、私には実感がない。

卒業アルバムの裏表紙の裏がカラフルなペンで埋まって、私もその応酬でクラスメイトの記憶の片隅を埋めていく。

「元気だね。輪廻」とだけ黒のマジックで書いて、あとカエルの絵とか描いていたら、やっぱりおかしいわアンタ、と言われた。

どうやらクラス内での私のイメージは思った以上に変人らしい。

「りんねちゃんはやっと、いやかなり変わってるなあと思ってました」「なんてダイレクトなメッセーに吹き出しつつ、「また会ったらよろしくね」とか「高校行っても仲良くしてね」なんかの常套句でさえこれから何年かして、この隙間風の通る校舎と、襟に三本ラインの入ったセーラー服と一緒に懐かしく、綺麗な思い出として思い返すことがあるんだろう。」

幸いにして、愛想のない上に気紛れで変人と評される私でも、ここでは友達っていう人種に恵まれていたのだし。

窓の外、コンクリートに少しだけ日の色が差していて、私は喧噪よ

り高い位置に視線を置いてそう思った。  
そうしたら、さつき式のときには感じなかった喉の痛みと同時に、  
泣きそうな気持ちが少し襲った。

「イッタ書いて」

そういうと、彼は「りんちゃん卒業おめでと 海原一太」とマツキ  
ーの太字で書いてくれた。  
なんというか、上には上がったものだ。

「あのさ、あんたも卒業すんじゃない」

「あ」

「何、マジボケ？」

「あー、じゃありんちゃん書いてよ」

いいけど、と私もペンを握る。常套句のふりをした願い。

「イッタ卒業おめでと、これからよろしく 潮平輪廻」

こういう少女マンガみたいな気持ちやエピソードやなんかも一緒に、  
もっとこの先の私にとって、優しい郷愁になるんだろうか。  
もしかしたら、失ってしまったあとに。

そう思うとさつきよりもっと泣きそうになって、そんな私にイッタ  
は、あーわかった、悪かった、と言って卒業おめでと、のあとにい  
びつなスマイルマークを付け足した。

わけがわからない、と私は笑い、イッタはさっさと自分のアルバム  
を閉じた。



「ねえイッタ」

「なんさー」

「今日これから暇」

「暇つすよ」

「ゆみちゃん」に行かない、と私は言う。

「なんでか、美紅のところに行く、という言い方を私はできない、というか、しない。」

「いいよ」

「あ、一回帰ってからでもいい、卒アルとか重いから、置いてくる」

「じゃー俺も帰るわ」

三時に駅でね、と言って別れる。

イッタの家は私の家と学校とのちょうど真ん中ちよつと我が家寄りぐらいのところで、だから彼は自転車通学だ。

別れを惜しんでか、お喋りに花を咲かせてなかなか帰ろうとしない女子たちの輪に、じゃあねー、と手を振って、私は教室を出る。りんねちゃんばいばい、またねー、という声に笑い返す。

人のいない廊下を歩く私は、また現実感のないまま変に脱力している。

早く出てきたとは言ってもだいぶ長い時間教室に残っていたので、電車はわりに空いている。

運転手さんの肩越しに線路の行く先を見守る私の反対側の端に、話したことの無い隣のクラスの女の子が立っていた。

さつき弱く差した日が翳り、白く滞る風景の中を歩く私はまだふわふわしている。

高校の入学式まで約一カ月の、モラトリウム。

笑い出したくなるような気持ちと寂しいような気持ちが隣り合って、深呼吸してから家路につく。

歩きながら横に見る海も白く停滞していて、吐く息もまだ白い。

堤防の上によじのぼって、海を向いてしゃがみ込む。

港に行こうか、と思う。

歩いて十分で、輸送用の船が出入りする港に行く。

ちょうど船の入っていない港は広くて、私はコンクリートの上を海の方へギリギリの位置まで歩いて、そこに座り込んだ。

妄想してみると中途半端にしゃがんだ体勢の私は、すぐに海へ落ちる。

冷たくなったセーラーの袖に顔を埋めて口ずさむのは、むかしこっそりカセットテープで聴いた古い歌謡曲。

海鳴りよ

海鳴りよ

今日もまた

お前と

私が

残ったね

ここにいくら違和感を感じたって、どこか他の場所にいる自分なんてとても想像できない。

私は、どこへも行けない。

漠然とそう思った私は、ただドイツとの待ち合わせに遅れないように、重い鞆を掴んで立ち上がる。

水面は、静かに波打って青黒い。

家に帰って階段を上がるとトイレから出てきたお姉ちゃんはやっぱ私をシカトして、自分の部屋も窓からの景色も遠く見える海もやっぱり停滞していた。

寒そう、と言われるベッドのアイスブルーのカバーに荷物を投げ出して、その中から想像した美紅の卒業アルバムの白い表紙裏に罪悪感に似たような感覚で、少し胸が痛む。

いい気になるんじゃない自分、と呟いたらどうしようもなく人恋しくなっ、私は階下に降りてお湯を沸かして、お昼ご飯代わりにインスタントのたらこスパを食べた。

お母さんはテレビを見ながら、冷蔵庫に牛乳プリンがあるわよ、と言って、おばあちゃんが卵焼きを作ってくれるというのでその言葉に甘えて、私の昼食は思ったより豪華になった。

ほの甘い卵焼きはとっても美味しかった。だけど、ストーブの点いているはずの居間はなんとなく肌寒くて居心地が悪くて、ご馳走様と言った私は三分だけテレビを見て廊下に出た。

三時ちょうど、私は白のセーターとジーパンにブルゾンを着込んで駅前の電信柱に凭れていた。

イッタは時間ぴったりに来て、遅刻だ、と言った私に文句を言った。イッタは紫っぽいへなつとしたセーターにジャンパーを着ていて、私服を見慣れない私は新鮮な気持ちで隣に並ぶ。

再発していた人恋しさはイッタに会って十パーセントまで、薄れた。あとはきつと、この押しつぶされそうな天気のせいだ。

「ゆみちゃん」に行くと、なんでか違和感を覚えた。

イッタが隣で「暖簾・・・」と呟く。そう言われてみると、紺地に白く「ゆみちゃん」と書かれた暖簾が、今日は外されている。

なんで気付かなかったんだろう。嫌な予感がする。お休みかな、と言った私の声はひどくちいさくて、イッタは「あ、でも、営業中だって」といつて曇りガラスに掛けられた札を指さす。

私は少しだけ安心して、引き戸の取っ手に手を掛ける。

店内に入るといつも通りにスープと湯気の匂いがして、らっしやい、というおじちゃんの声がして、私はイッタと並んでカウンター席に座る。

それでも落ち着かなくて、早く安心したい、と思う。

なぜかわからないけど、そう思う。さっきまで普通に見ていた灰色の海がまた見たくなつて、入口に目をやる。

がらつと戸をあけて近所の人らしいおじいさんが入ってきた。

「りんちゃん、突然なんだけどね、お店たんで引越そうと思うんだ、おばちゃんたち」

ふつ、と視界が狭くなる。嫌な予感は的中したのに、声はどこか現実でないところで響く。

「・・・美紅？」

うん、と目を伏せておばちゃんは頷く。

納得がいかない、と呟いた声は届いていないほうがきつといい。引越したって美紅が部屋から出てくるかって言ったらそんなのはわかんないけど、このままここにいてもそれは絶望的だと思う。

おじちゃんにも、おばちゃんにも、どうにもできないんだと思う。もちろん、私にも。

おじちゃんもおばちゃんもけっこう年がいつてるから、美紅もいつまでも引きこもりじゃられないだろう。

おじちゃんのごつごつした手がへいお待ち、と差し出したラーメンには、薄切りの合格ナルトが載っていた。

食べ慣れた味のラーメンを食べながら、私は鼻をすすった。

下げられた暖簾。教えてもらえなかったお店の名前の由来。同級生のお父さんやお母さんに比べてだいぶ年を取っているように見えるおじちゃんとおばちゃん。

そして思い出したのは中学校一年生の夏休みの課題、美紅の言葉、あたしの名前、には、意味が、ない、と。

「ゆみちゃん」は「由美ちゃん」だろうか、それとも、

憶測でしかない、と言い聞かせて、泣きたくない私はいつも通りにごちそうさま、と挨拶をして店を出る。

“私の名前には意味がないの”

“私もだよ、まったく、何考えてこんな名前つけたんだか”

“りんちゃんはいいじゃん、いい名前だと思うけどな”

“でもさ、うちのお姉ちゃん由紀子だよ、ユキコ。何の関係もないじゃんね、なんでユキコの下が輪廻なんだ”

“・・・関係ない方がいいじゃん、そんなの”

“まあそうだけどさ・・・”

「 イッタ、海が見たいよ」

イッタは黙って私の手を引いてくれた。

浜に降りてすぐ、海は満潮になった。

私とイッタはじわじわと上がる水面に追われるようにして、テトラポットの上まで逃げた。

空は白に近い灰色で、やけに底冷えがして、油断すると齒がかちかちと鳴る。

「イッタ」

「うん？」

「私は、ここから動けん」

「うん」

「美紅やイツタやみんなみたいに、ここから出て行けない」

「うん」

「私は、この海に縛られてる」

「・・・」

「・・・」

そうだな、とイツタは口を開いた。

その声は今想像したよりずっとずっと優しくて、イツタはそういえばずっとこんな優しい口の利き方をする。

目を閉じたら、涙みたいなのが一筋、鼻筋を通って顎に伝った。

「りんちゃんがないと、海が寂しがるからじゃない？」

ぐしゃぐしゃに泣きながら、私は口元だけで笑った。

りんちゃん、好きだよ、とイツタが海に向かって呟いた。

この町の三月はいつだって曇り空だ。

だけどそれも終わりに近付いた今日は暖かくて、開け放した窓からぬるい空気が入る。

海沿いの道で車に乗り込むとき美紅はやっぱり毛布を被っていて、美紅、またね、と私が手を振ったら、りんちゃんまたね、と蚊の鳴くような声で返ってきた。

イッタは寮に送る荷物を作るとかで、あと三日で送んなきゃいけないのになんもしてねーや、と言って私を苦笑させた。

私は去年買った不思議の国のアリスのイラストがついたメモ帳の一番最後のページに、買ってもらったばかりの携帯電話の番号とアドレスを書いてイッタに渡した。

そのうちアイスブルーのベッドの上で雑誌をめくっていた私は、夕方に近付くにつれ冷たくなってきた外気に、窓を閉めに立つ。

いつか話を聞いて

思い出になつたなら

私たち いつか話をしよう

寂しさに負けたなら

始めよう

また

始めよう

コンポから流れ出すBONNIE PINKの歌声と重なるように、急に強く雨の音が聞こえた。

見ると窓の外は相変わらず白く煙っていて、人恋しくなる私はコンポの音量をひとつ下げ、ベッドに戻って目を閉じる。

遠くでゴウン、ゴウン、ゴウンと工場の音が聞こえた。低い機械の音と雨の湿った匂いは夢と混ざる。

少しだけ寒い部屋にあと少しだけの猶予期間。

真新しい携帯電話が、いちばん最初の着信音を響かせた。

了



## 海の夢（後書き）

### 引用

・中島みゆき「海鳴り」（アルバム「愛していると云ってくれ」より）

・BONNIE PINK「再生」（アルバム「Just a Girl」より）

## 錨の月

果たされない約束をいくつしたら大人になれるんだろう、と、いつも思っていた。

小学校のとき理科の授業で、右側が丸かったら上弦の月、左側が丸かったら下弦の月、と習った。  
帰り道に見上げた月は見事に真下が丸い細い月で、海に沈む錨を思った。

その日母親が二回目の、父親が三回目の離婚と再婚をして、母の連れ子だった俺は父方に籍を移して、連れ子を迎える側になった。

一日にしていなくなつた兄は俺を一瞥してただ「じゃあな」と言い、一日にしてできた五歳の妹は俺を見ると泣き出した。

俺はどっちにも、どもつす、と返した。

中学校に入学して二年目の春は、暖かくなるのがやたらと遅い。

四月も半ばだというのに朝夕は寒いぐらいで、校庭にある桜も八分咲きで止まっている。

異常気象を訴えるテレビを横目に家を出て、自転車に乗る。月曜日の朝はありふれた一週間の始まる憂鬱とちょっとした期待と春ならではの甘い匂いと、ランドセルを背負ってひよこみたいな黄色い帽子を被った幼稚園児なんかを横目に、鼻歌を歌いながら時速十五キロで流れていく。

途中で会ったクラスメイトと自転車に乗ったまま小突き合い、おすおす、とぶざけあいながら学校へ向かう。

市内に二つあったうちの一つの中学校が少し前に廃校になり、海の方に住んでいる中学生の多くは電車通学になった。

俺の住んでいるところは駅と駅の丁度真ん中で中途半端な距離にあるので、自転車で約三十分かけて登校する。

自転車置き場を出るときに見た桜の木はやはり八分咲きで止まっていて、俺は視線を戻して昇降口へ急ぐ。

「イッタおはよう」

聞き慣れた声が耳を揺らして、何か思い出しそうだった俺はそっちに気を取られて振り返る。

「お、りんちゃん」

「おはよ」

「おはよっす」

俺のおはよっす、はどうやらおあよっす、とぼやけて聞こえるらしく、りんちゃんはいつもそれを聞くとふふ、と声だけで笑う。

俺はガキなので気を引きたくて、りんちゃんの前だと三割増しゆるーい感じで喋る。

「あ」

「なに、イッタ」

「思い出した」

「なにを」

「や、さっきからなんか思い出しそうだったんだけど」

「なに？」

「宿題やってねー俺、英語の」

なにそれ、ばかー、とりんちゃんの目元が緩んで、俺はにやりとして階段を一足飛びに上る。

隣の教室に入るりんちゃんを目で追ってから、チャイムと同時に一番後ろの席に滑り込む。

りんちゃんは潮平輪廻、という名前で、俺は知り合ったときからずっと、りんちゃんと呼んでいる。

輪廻、という名前はかなり変わってて格好いいが、りんちゃん、という呼び名は口の中で転がすとても舌触りがよくて、薄いカーテンや長いスカートやなんかのドレープを思い出す。

俺はりんちゃんのが好きで、肩までのまつすぐの髪も細身の肩も少し内股の足下も、ぜんぶを目で追ってしまってたっている。

だけど、この町を離れて過ごした一年か二年間の間、りんちゃんに会えなかったときは本当に毎日困っていたから、今の状況は困っている中でもきつと良くなった方なんだろう。

そう思っ、体重を掛けるとガタガタいう木の机に向かった俺は、すぐに大きなあくびをする。

服を作り始めたのはいつからだっただろうか。

始まりは、あまり好きじゃなかった白の上履きと、灰色のゴムのよ  
うな床を見るともなく見ていた、あの頃。

つま先で擦ってきゅうきゅうと音を立てては、よく担任の先生に叱  
られた。

母親と暮らしていた頃の一時期はすごく貧乏で、お金がない、とい  
うのが合言葉みたいな生活をしていた。

毎日パートで疲れて帰る母親に新しい服を買ってとはとても言い出  
せず、痩せてウエストは緩いのに手足だけによきによき伸びた俺に  
は、ずっと穿いていたジーパンの丈はかなりかっこわるい感じにな  
っていた。

仕方ないので膝ぐらいの丈に切って裾をわざとほつれさせ、ついで  
に軽石で擦って色を落としたらクラスメイトにかなり好評だった。

いい気になった俺は成長期をいいことに微妙なサイズになった服を  
ことごとく切り、縫い、破り、くつつけた。

その当時流行っていたプラモデルを組み立てる代わりに、見よう見  
まねで布と布を合体させて過ごした。

失敗して着られなくなったり、親のを勝手に改造して怒られたりし  
ながら、いつの間にか俺は小遣いをもらえば手芸センターや生地屋  
に走るといふかなり変わった少年期を送ることになっていた。

それは今も変わらず、俺の頭の中を成分分析したらきつと服とりん  
ちやんで八十五パーセントぐらいは占めているんじゃないかと思う。  
そして残りの十五パーセントにめんどくさいことや最低限のことを  
押し込んで、どこまで生きていけるか。

それが今のところ、十三年とちょっとしか生きていない俺の、人生  
最大の賭である。

緩い下り坂を降りきって自転車を停めた。  
今日も一日終わったな、と眠りかけていた頭を起こして、見上げた空は白く煙っている。  
階段の上の窓から入る空気の匂いに立ち止まって、それから最後の一段を上る。

部屋の隅で中途半端に古いミシンの蓋を開けると、どうしようもなくわくわくする。

図書館で借りた雑誌から模造紙に写した型紙に当てて、缺を入れる。襟、袖、前身頃、後身頃。切り離れた型紙を、裏表に二つ折りにした布に載せて、ピンで留めていく。

古い色鉛筆の水色で縫い代を取って線を引き終えると、知らず知らず頬が緩む。

一枚の布が身体を被う形を造る。平面から、立体を造る。

一昨年の今頃、二メートル三百五十円の安い布で初めて作ったシャツは袖も裾も襟元も歪んでしまっただけで、でも俺は肩幅がきつくなるまですっとなんかそれを何度も、何度も着ていた。

だけど、最近どうもミシンの調子が悪い。

糸の絡まることが多くなったし、なんとなく動きが鈍い。

仕方ないので、最近はミシンを使うのは最低限にして、手縫いでできるものばかり作っている。

おかげで嫁に行けると豪語できるぐらいかがり縫いもすそ上げも大得意だけど、しばらく使っていないミシンはやけに悲しそうな気がして、俺はそれを見ながらときどき途方に暮れたような気持ちにな

る。

奴の元の持ち主は、小学校の家庭科の講師の先生だった。

俺があまりにも嬉々としてそれを動かすもので、家庭科室のミシンを買い換えるときに古くなったのを一台譲ってくれたのだ。

そのころの俺はひたすらぼーっとしていて、無感情、無感動、と通知票に書かれる子供だった。

別に何がつまらないわけでも嫌なわけでもなく、ただ毎日楽しいことも悲しいこともなにもなくて、ただ過ぎていただけだった。

周りから見れば複雑な家庭環境っていうのもあったのだろう、担任の先生が結構心配してくれていたようで、珍しく夢中になっていたからと講師の先生に頼んでくれたらしい。

白いボディがちょっとだけ黄ばんだそいつは、その時から俺の生涯の相棒と決めた。

ミシンを踊らせている間は、何も考えずに済んだ。

布に鉄を入れる瞬間、そのことだけ考えていられた。

だから、

だから

服作りが好きになった。

俺の今の母親の子どもは女の子で、夢芽、という。夢の芽、と書いて、ユメ。いい名前だと思う。

人なつこい性格で、俺のことをおにいちゃん、と呼ぶ。俺は、彼女をゆめ、とか、ゆめちゃん、と呼んでいる。

糸が詰まった。

ここしばらくとくに調子の悪いミシンを酷使していたから、いい加減きつかったらしい。ちょっと分厚いデニム地の布を縫おうとしたら、針の先に変なふうに糸がからまって、取れなくなってしまった。仕方ないので縫いかけのところは諦めて、団子になった糸を糸切り鉋で丁寧に取り離していく。

全部切り離して糸をかけ直し、試しに薄い布を縫ってみる。縫えないことはないが、少し雑音が多いのと、引っかかるような感じがする。

修理に出したほうがいいかな、と一人ごちる。

たしか街へ出れば、ミシンの修理をしてくれる店があったはずだ。古い型らしいけど、まあなんとかなるだろう。

なんとかなるだろう。そう、何度も思い浮かべた。

なぜか、不安が消えてくれなかった。

部屋の隅に立てかけておいた今は使っていない、折り畳み式の古い木のミシン台を引っ張り出す。

これは俺の、最初の、産みの、母親が使っていたもの。

俺はそれから一階の和室の隅にそれを組み立て、その上にミシンを載せた。

そして、誘われていたカラオケに参加する旨のメールを送り、外へ出た。



電車代をケチって自転車で三十分か四十分、微妙な感じの繁華街でカラオケと、ファーストフード。

健全な中学生の俺たちは、これでもじゅうぶん夜までもつ。同じクラスのカズヤ、シヨウタと、隣のクラスの宮田と、課長（もちろんあだ名）、と俺の五人。だいたいいつものメンバーになる。

夕飯代わりのマクドナルドを出て、もう暗くなりかけた通りを歩く。新しくできたショッピングセンターに行こうと誰かが提案し、くだらない話で騒ぎながらそこへ向かった。

歩いて数分で、まだ賑わっているそこに着き、とくに目的もないのを見てるだけー、と言って服屋や雑貨、本屋なんかを順にひやかして回った。

皆がそれぞれに雑誌を立ち読みしている間に、レジの近くで文房具のためし書きの用紙にラクガキをしていた俺はふと、目を上げた。

本屋の向かいの子供服売り場から、女の人がこつちを見ていた。

細身で、黒のロングスカートを穿いている。俺は目が悪いのではありません。きりとは見えない。

そのうち彼女は急に俯き目を逸らすようにして、足元にじゃれつく小さい子の手を引くと、店内に入って行った。

いつでも、会いにきていいんだから。

お母さんの子どもは、一太だけだと思ってる。

いつも、いつでも、

約束は、守られない。嫉妬するのは、子どもっぽい。

あの狭いアパートで、帰ってこない再婚相手、を待ちながら、彼女

が幸せであればよいと、願っていた。  
きっと彼女は今、幸せなのだろう。そうであればよいと、いつも願っていた。それなのに、

手に持っていたペンが床に落ちた。

俺はそれを棚に戻して向きを変えると、本屋の店内を小走りして、ジャンプを読んでいるシヨウタに向かいすりゃあとばかりに膝かつくんを食らわせてみた。

うおっ、と悲鳴を上げてシヨウタが危うくジャンプを取り落としそうになる。

「うおおいてめーなにすんだっ」

「あ、すんません足が滑って」

ジャンプを平積みに戻したシヨウタが繰り出した仕返しの足払いをしれつと避けて、次にファッシヨン誌のコーナーにいるカズヤと課長（しつこいけどあだ名だ）にちょっかいをかけに行く。

「なに、メンズノンノ？」

「課長のモテ化計画」

「うつわ、ぜってー無理っす」

「頼むから協力してくれ、切実なんだ」

「俺は危険な賭けはしないタチでね」

「ひでーよ兄ちゃん！」

「誰がお前のにーちゃんだ」

「あれ、宮田は？」

「エロ本じゃねえの」

あ、俺も行く、とカズヤが男子中学生らしい意欲的発言をしたところで、コミックサイズの袋を持った宮田に揃って頭をはたかれた。

「おめーらうるせー、っていつかなあにがエロ本だ、俺は健全にマンガ買ってたっつーの」

「あ、エロ漫画か」

「ばれたか・・・って、ふざけんなっ」

それからお決まりの大爆笑したいつものメンバーは店内整理をしていた店員にちよつとだけ迷惑そうな顔をされながらシヨッピングセンターを出て、補導されない程度の時間に解散する。

人気のない近道を自転車でたらたら走りながら、俺たちは飽きることなくバカ話をして笑っていた。

ふと声が途切れ、海の匂いが鼻についた。

「あーあ、なんかさあこれぞ青春って感じだね」

ふいにカズヤが少し上を向いて、言った。

背の高いこいつはかつこつけて乗っている折り畳み式の自転車のサ  
イズが微妙に小さくて、こぎにくそうに見える。

「なんだそりゃ」

「いや、なんかさあ、ずっとつるんでたいよな、こつやつて。うん、  
ずっとつるんでようぜ」

約束は。

「うつわ、お前くさすぎ」

「うるせー、ロマンチストと言ってくれ」

「わかる気はするぞ」

「む、課長お前もか」

「男のロマンだ」

「それは違うだろ」

いつも、いつだって。

約束は、守られないのか？

そう、りんちゃんと一緒にいるときはまた違う居心地の良さに、胸をちくりと刺す棘のようなものはとても邪魔に思える。

「でもちよつとかつこいいぞカズヤ」

「だろ？」

「自分で言うか」

「モテ化計画だ」

「関係ねー、あ、あるか」

「ねーよ」

「お、やっべ、俺ここで曲がんだ」

「帰んのに道間違えてどーすんだシヨウタ、頭わり」

「うっせ、話きーてたんだって。じゃーな」

「おー」

「あれ、一太どこ行つた」

「シャレっすか」

「うお、いた」

「俺こつち」

「じゃあなー」

皆と別れて少し家の遠い俺はあと十五分少々、力一杯自転車を飛ばした。

斜め上を見上げると、ちかちか光る街灯に薄茶色の蛾のようなのが止まっている。

潮の匂いが濃くなって、天氣が崩れるのか空はどこまでも闇で黒かった。

始まりは些細なことだった。

ある日の夕食後、父親と夢芽が喧嘩を始めた。

原因は、たしか夢芽の好き嫌が多いとかそんなことで、最近アニメの影響かめつきり言葉遣いの悪い夢芽は声高に口答えをしていたが、だんだんむきになって涙目になってきた。

「おとうさんは夢芽がかわいくないんだ」

へえ、と思う。どこでそんなセリフ覚えてきたんだか。

「おとうさんは夢芽のほんとおとうさんじゃないから、おにいち

「やんの方が大事なんでしょう」

父親が黙った。俺は、驚いた。

「すげえな、と思った。こいつ、すげえな。」

俺が十三年間生きてきて一度も言ったことのない言葉を、この子はたった七つか八つで手に入れたんだ。

そう思うと軽くショックを受けた。

夢芽は声を上げて泣きながら、俺の横を通り抜けて和室に飛び込んだ。

少しして、夢芽、と遠慮がちに声をかけて父親があとを追う。

俺は半間ほど開いていた襖を少し広げた。

泣きじゃくる夢芽が暴れた拍子に、部屋の隅に置いていた古いミシン台にぶつかった。ぐらり、とそれが傾ぐ。

危ない、と思った。

俺は割と運動神経がいい方だから、立っていた部屋の入り口から全カダッシュすれば倒れるそれをおしとどめることぐらい出来るはずだった。

そして俺は、実際瞬発的にそれを試みた。

けれど、部屋の真ん中で身体が止まった。

今度こそ、血の気が引くようなショックを感じた。

動き出す瞬間無意識にしたシミュレーションで、俺が守ろうとしたのは、

義理の妹じゃなく、壊れかけたミシンだった。

古い木の台はこの間観た映画のようにスローモーションになっただけじゃなかった。

鈍い音を立てて、ミシンが畳に落ちた。その上に木の台が倒れる。

蝶番がぶつかったのか、金属の音がした。夢芽はミシンから五十センチほど離れたところにしゃがみ込んで、まだ泣いていた。夢芽ちゃん、と、後ろから今の母親の泣きそうな声がした。

俺はミシンを抱えて階段を上り、部屋に行く。

針は折れていなかったが、コンセントを挿さないまま机に置いたそれは、なんとなく不気味に見えた。

これは何だ。棺桶の窓越しに死んだおじいちゃんの顔を見たときと同じ気持ちだ。吐き気がした。

階段を上ってくる足音がして、いったくん、と遠慮がちな女の声が告げた。

なんすか、といつも通りに答える。

彼女は俺がいつまでたっても敬語を使うのがあまり好きではないみたいだ。不安そうな顔になる。

申し訳ない気もするが、俺はどうしてもタメ口をきけない。

「一太くん、お父さんが、ファミレスにパフェでも食べに行こうかって・・・夢芽、泣きやんだから。あなたも行く」



俺はいつす、腹一杯なんで、と言つと、そう、と言つて曖昧に笑い、ドアを閉めた。  
きしつと軽い音を立てる。

ミシンのコンセントを繋いだ。いつものように糸をかける。  
右側に付いているつまみを回すとき、引つかかるような違和感を覚えた。

祈るような気持ちでスイッチを入れたけれど、白がくすんだ相棒はもうくたびれたと言わんばかりに、沈黙を守り続けた。

・・・おい、どうした、動けよ。

車のエンジン音が遠ざかるのを待って、声に出して言ってみた。

動け、動いてくれ、

軽く叩いてみた。ぺたぺたとボディをはたいては、スイッチを押す。  
だめだった。

動けよ、動いてくれよ、お願いだから。

初めは、手のひらで。次に、拳で。

弾みで彼は床に落ち、がちゃんと大きな音を立てた。

いつのまにか、俺は床に転がったミシンをめちやくちやに殴りつけながら泣いていた。

悲しくて悲しくて悲しくて悲しくて、身体の奥の何かがぐしゃつと潰されたように涙が溢れて止まってくれない。

気が狂ったんじゃないかと思うくらい、涙も鼻水も涎も絞り尽くしたとき、俺の右手は血だらけで、相棒はプラスチックの身体が割れ

て悲惨な姿を晒していた。

立ち上がり、部屋の電気を点ける。洗面所に行つて顔と手を洗い、少しだけ吐いた。

外側に埃の積もつた磨りガラスの小さな窓から、滲んだ月が見えた。ちよつど手を伸ばした位置にある窓を開ける。

錨の月が笠を被つていた。

俺は部屋に戻り、折れたミシン針の尖つた方で三つ目のピアスの穴を空けた。

次の日は雨で、傘をさして自転車に乗つた俺は知り合いに会わずに学校に着く。

いつも途中で会つてふざけ合うカズヤやショウタは、雨の日は電車で登校していたはずだ。

そついうわけで、背中にぺたんこのカバンを背負つて傘の柄を押さえて、黙つたまま自転車をこいだ。

ひよこみたいな幼稚園児たちは自分より大きいような雨傘を掲げ、道の端に一列に並んで、静かに行進している。

「イッタ、なんかすさんでる」

昇降口でりんちゃんの声を聞いたら気持ちがあつと緩んで、俺はあと少しで座り込んで泣き出すところだった。

「イッタどうした？」

「・・・うん？」

「これ、包帯直した方がいいかも、濡れてるもん」

保健室の窓から、濡れた花壇が見える。

雨と血が滲んだ右手の包帯を解いて、りんちゃんの手が触れた。

「ミシンが」

「ん？」

「ミシンが壊れてさ」

うん、そうか、とりんちゃんは言って、乾いた包帯を丁寧に巻き直してくれた。

「ありがと」

「うん」

はい、とりんちゃんが笑った。

俺はどうしても笑えなかった。りんちゃんはもう一度ふふつ、と声だけで笑って、雨の打ち付ける窓に額を付けた。

長い睫毛に縁取られた黒目がちの目は、だけど笑ってはいなかった。

「ねえイッタ」

「なんすか」

「海に行こうよ」

「今からっすか」

「うーん、じゃあ学校終わったら」

こついうりんちゃんの変なところでまじめなところも、俺は好きだ。  
すぐにでも、今すぐにでも、と、期待はしなかったと言ったら、嘘  
になるけど。

「どうですか？」

「そうつすね」

放課後になってもまだ降り続く雨の中を、俺とりんちゃんは海まで  
歩いた。

高さ一メートルほどの堤防越しに眺める海面は凪いでいたが、船の  
影は見えない。

灰色に煙った水面に、雨が穴を開けていく。

俺は笑えなくて、声を出すこともできなくて、きつとこういうのを落ち込んでいるっていうんだろ？ とぼんやり考えた。

前を行くりんちゃんの足下は相変わらず少し内股で、たまに危なっかしい。

だけどその背中にはまっすぐに伸びて、黒い傘の先もまっすぐ上を向いていて、俺は相変わらず見とれる。

そのうちりんちゃんは堤防に登り三十センチほどの幅しかないそこを歩いていく。

俺もそれに倣うと、バランスを崩して向こう側のテトラポットの上に足をついてしまった。

「あぶね」

地味に心底びつくりした俺を見て、りんちゃんは笑った。  
それを見て俺はやっと、笑えた。

「よかったよね、海じゃなくて」

「悪運強いっすから」

「でもイッタ落ちても無事そう、海に」

「泳ぎ得意っすから」

「イッタ、」

りんちゃんが立ち止まった。

堤防を諦めてテトラポットの上を歩いていた俺も、また少しバランスを崩して立ち止まる。

振り返ったりんちゃんと目が合って、海からの風が少し強く吹いた。雨がもうほとんど降っていないことに気付く。だけど空は低く、雲が覆っている。

そのまましばらくの沈黙で、りんちゃんは少し困ったように目を伏せた。

俺はその表情がとても好きで、ずっと見ていた。りんちゃんは何か言うように口を開きかけたが、そのまままた前に向き歩き始める。しばらく歩いて堤防が途切れたところで、もう一度立ち止まって今度は振り返らないまま、言った。

「あのさイッタ」

「なんすか」

「来年の今頃、って信じる？」

唐突なその質問の内容は信じるとか信じないの問題じゃないような気がしたが、  
今、温い空気の中海沿いを歩く、十三歳の、子供の、俺たちには、似合う気がした。

「私は、あんまり信じられないんだけど」

「・・・俺もっす」

「去年とか、来年の今頃こうしてるかな、って思ってたこと、っていつか、当たり前みたいに信じてたこと、が崩れちゃったんだ、私」

「・・・うん」

りんちゃんと仲が良かった北島美紅が、去年の秋から学校に来なくなっただ。

りんちゃんは多くを語らないけれど、どうやら北島は部屋から出てこれなくなっただしまったのだという。

俺は、少しだけ、責任を感じた。

夏休みの始まっただ、北島に呼び出されて、付き合ったださい、と言われた。いわゆるコクられたっただ。

俺は、好きな人がいる、と断っただ。その矢先のことだから、もし北島が部屋から出られなくなるぐらいい、落ち込んでしまったのなら、その責任の一端は俺にもあるぐらいい気がしたのだ。

ただ、そうならなおさら俺の顔は見たくないんじゃないかと思うと、毎週北島の家まで訪ねていくりんちゃんに付き合っただ家の前までは行っただも、俺は中に入らずに外で待っただいるだけだ。

その責任はどこで償っただらいいかわからなくて、そして確証もない。いつか会うことがあっただも、たぶん訊くことはないだろ。

りんちゃんが自殺未遂をしたと聞いたのは、小学校を卒業した春休みだっただ。

俺はガキで、自殺なんて概念を知っただはいても持っただはいなかった。だから本当に、本当にびっくりにして、覚えてる限り幼稚園以来に、親の前で泣き叫んでだだをこねた。

この町に、りんちゃんがいる町に、戻ると言っただ。

ちよっだ父親の仕事の関係もあり、俺はここに戻っただきた。りんち

やんに会うために、戻ってきた。

そして中学校に入学し、りんちゃんと再会した。  
入学式、りんちゃんは平然と、何事もなかったように、前を向いていた。

どうやらその事件は大事には至らなかったらしく、小学校から中学校へ環境が変わったのもあってかあまり噂にもならず、先生もそんな風は見せなかった。俺は友達伝えで聞いたので、親も知らなかったぐらいだ。

中学に上がってから一度、りんちゃんとそっという話をする機会があった。

少なくとも遠慮がちにでも率直に訊くことのできるぐらいには、俺とりんちゃんの距離はちょうどよかった。

家族とかに心配されない？と尋ねたら、本人は、うちは放任だから、あんまり危機感はないみたいだけど、と、言っただけだ。

夏が過ぎてからこっちは顔を合わせてもどうでもいい話ばかりで、あまり真面目な話もしていないから、りんちゃんの悩みを打ち明けるときの癖で、緊張したように張り詰めた顎の線が懐かしく見えた。

「信じられるようになりたいとはね、思っただけど、いや、思っ  
てないのかな・・・わかんないや」

「うん」

「ねえ、イッタ」

「ん」



「イッタは、大丈夫？」

ぐう、と涙がこみ上げて、俺は急いで海の方を見てそれを止めた。  
海は凪いで雲の切れ間から、弱々しい光がまっすぐ下りている。

「うん」

「うん、そうか」

「りんちゃん、」

「うん？」

「・・・なんでもないっす」

好きです、と言おうとした言葉は、飲み込んだ。

「りんちゃんは？」

「え？」

「りんちゃんは、だいじょうぶ」

「・・・うん」

空気が少しずつ乾いてきて、テトラポットの上に座った俺とりんち  
ゃんは黙ったまま海を眺めていた。

気が付いたらもう夕方で、ふと斜め上を見ると真下の丸い、細い月  
が、白く光っていた。

「錨に見えん？」

「あ、見える」

いかり、という単語は普段使い慣れないから聞き取りにくいかなと  
思ったけれど、予想に反して即答された。

俺はそれがやたらに嬉しくて、立ち上がりながら声をあげずに笑っ  
た。

そうして、来年は一緒にクラスになれるといいな、などと考えなが  
ら、錨の月の沈む中を家路についた。

了

## 錨の月（後書き）

### 【参照・引用】

月の満ち欠け

http://www.ksm.or.jp/astro/kan  
soku/library/tukizen.html  
http://tamagoyane.jp/potech  
i/2000/20001108.htm

\* \* \*

第二話ですが、少し昔の話です。

## 紅の未来

亡くなった姉のことを知ったのは、中学一年の夏の終わりだった。夏休みの宿題で自分の名前の由来を調べるとというのがあって、ラーメン屋を営む両親の手すきの時間を狙っては、面倒くさがる彼らにしつこく訊いた。

海沿いにある店の二階の自宅、辛い話になるかも、と珍しく真剣な顔で言われて、私はそのとき今はもう捨てられてしまった食卓の薄茶色のテーブルの向かい側に座って、それを聞いていた。

電車を乗り継いで、大学までは一時間ちよつとだ。

街中にあるにも関わらず鬱蒼とした緑で周りを囲む造りを、私はけつこう気に入っている。

五月も半ばを過ぎて、男子より女子の多い大学の構内には、カラフルな夏物のミニールの足音が溢れている。

細いヒールで三階まで階段を使うと、運動不足の私は少し息が切れる。

九時ちようどに始まる一限に間に合うように教室に入ると、サキがもう真ん中あたりの席に座っていた。

染めないまま真っすぐな黒髪が頬を半分隠して、難しい顔をして文庫本に目を落としている。

七分袖の白いシャツにジーパン、スニーカー。いつものように無造作な格好。

おはよう、と声を掛けて隣に座ると、彼女はおはよう、と答えて本を閉じた。

そのまま少しの、沈黙。いつも先に口を開くのは、私の方だ。

「ねえねえ、明日の課題終わった？」

「心理学のレポート？」

「そう、それ」

「あとちょっと」

「いいなーあ」

「とか言って終わってるでしょ、美紅は」

「うーん、私もあとちょっと」

はは、頑張ろ、と。笑う。低めの声。いつもの会話。

教室のドアが音を立てて、知り合いが何人か入ってきて、私は手を振っておはよう、に応える。

二・三言会話を交わして、サキの隣に戻る。プラスチックの椅子の背もたれに、少し深く座る。

外して机の左端に置いた腕時計が九時を指して、いつのまにか入ってきていた教授がマイクのスイッチを入れるぶつつ、という音で、また今日も一日が始まる。

北島さん、と、少し低めの声で話しかけられたのは入学式だった。

彼女は私のひとつうしろの出席番号だった。

「席、ここでいいよね？」

あ、うん、と言って私が椅子の後ろの番号を示すと、彼女はありがとう、と言ってそこに座った。

あ、うん、の「あ、」がアンバランスに浮いた気がして、少し後悔した。

彼女は小柄で色白で、目の大きい子だった。

「あの、・・・北島、美紅です。よろしく」

先に話し掛けたのは私で、彼女はゆっくりと笑ってそれに答えた。

「うん、私は桐原です、桐原早紀。よろしくね」

あくしゅ、と言って差し出された手を握り返した。細くてきれいな手だった。

それきり彼女は積極的に私に話しかけるわけでもなく、姿勢よくまっすぐ座って前を見ていた。

りんちゃんに似ているな、と思ったら、喉の奥がちりっと痛んだ。

りんちゃんのことを私の何と言ったらいいのか、私はいまだにわからない。

小学校に入学したところから中学に上がる前の私たちを知っている人は、まちがいなく親友、または、そんな思わせぶりな言葉を使わな

くても、相当仲良しの友達、と二人のことを言っただろう。

それが嫌だったわけじゃない。むしろ、りんちゃんのこととは大好きだった。本当に。

だけど、りんちゃんはあまりにも、私には超えられない壁を軽々と越えた。

あまりにも、私が持っていないものを、欲しかったものを、持っていた。

だからいつも悔しくて、私は傷ついた。りんちゃんに、嫉妬した。

そう、りんちゃんの生きづらささえ、私は認めようとせずに、自分が傷ついたような顔ばかりしていた。

私は中学一年の夏から引きこもりになったから、そのあと私とりんちゃんの間を周りがどう評したかは、知らない。

進みの遅い一限は、宗教学。ホワイトボードに書かれた、輪廻転生の文字に、反応してしまう。

りんちゃんの名前。輪廻。

何度も生まれ変わる。業のある限りの無限のループ、なのだそうだ。

私の育ったのは、海の街。

生まれたのは違う土地らしいけれど、物心ついたときからはずっと、海沿いの道路に面したラーメン屋、その二階の自宅で、両親と三人

で暮らしていた。

ざわざわした店の雰囲気は、あんまり好きではなかった。工業地帯と住宅地のちょうど境目ぐらいいにあった店は、工場で働く人のお昼休みにはいっぱいになって、労働者の男の人、大きな声や乱暴な物言いや独特のがさついた空気が、私は苦手だった。

今は、母は食品会社の下請けで加工工場のパート、父は知り合いの中華料理屋を手伝っている。

ラーメン屋は、引越したときに閉めてしまった。

下ろされた暖簾を私が目にすることはなかったけれど、紺地に白く「ゆみちゃん」と抜かれた文字はよく憶えている。

ゆみ、みく。

自分の名前の由来と、小さい頃から不思議にも思わなかった店の名前の、由来。

両方を同時に知った。私が生まれる前に亡くなった姉の名を、両親は大事に抱いていた。

卑屈だった私は、私の名前は私ひとりのものであれば、意味をなさないと感じてしまった。

そしてその次の日、から、私は自分の部屋から出られなくなってしまった。

“りんちゃんはいいいじゃん、いい名前だと思うけどな”

“でもさ、うちのお姉ちゃんユキコだよ、ユキコ。何の関係もないじゃんね、しかもめっちゃ普通の名前じゃんね、なんでユキコの下



が輪廻なんだ”

“・・・関係ない方がいいじゃん、そんなの”

“まあそうだけどさ・・・”

まあそうだけどさ、なんでこんなに居心地が悪いんだろう。

ぼそつとそう言ったりりんちゃんの細い顎の線が震えていて、そういうふうにはりんちゃんが弱音を吐くのは、とても珍しいことだったのに。

それなのに、私はそれを認めたくなかった。

自分の存在価値が否定された出来事を、りんちゃんという居心地の悪さより、ずっとひどいものだと思っていた。

自分の話ばかりを聞いて欲しくて、自分だけが傷ついていてたくて、りんちゃんは何も知らなかったのに私は自分が否定されたような勝手に傷付けられたようなプライドを折られたような気持ちになって、それをりんちゃんに知らせたくてりんちゃんに傷付けられたと思いきみたくてりんちゃんに傷付けられたと言いたくって被害者ぶってわざとそうしたくって乾いた声で笑った。

“ははっ、何それー”

ため息を吐いてみた。海は蒸し暑く風いでいた。とげとげした気持ち。りんちゃんは黙っていた。

翌朝起きようとしてみたら身体が重くて重くて、冷房をかけていたら寒くて冷房を切ってみたら暑くてとりあえず温度を最低にして毛布を被ってみたら、もう一步も動けなくなっていた。

秋になり冬になるにつれて部屋は寒く寒くなり、私はやっぱり毛布を被ったまま、エアコンの温度だけをどんどん上げていった。

中学に入学した年、好きな人がいた。同じクラスの海原一太。夏休みに入る前、私は告白して、ふられた。好きな人がいる、って。

その好きな人、が、りんちゃんのことだということを、私は知っていた。

その日は一学期の終業式で、暑く、晴れていた。みんなぜみがるさいほど鳴いていた。

カラーを抜いた海原の学生服の襟元を、私はずっと見ていた。

海原のことを名前ではばなかったのは、りんちゃんが彼をイッタ、と呼び捨てにするみたいに名前ではばなかったのは、あえて海原、と苗字で呼び捨てにしたのは、私のことをいちども名前ではばなかった彼への、幼稚な仕返し。

引越してすぐに知らない人ばかりの中で入試を受けて、決まった高校の制服は淡いブルーのスカートで、私はまるで戦場に行くような気持ちでそれを着た。

それを脱ぐころ、私は当たり前のように外に出て、喋ったり、笑ったりできるようになっていた。

だけど、根本的なところは何一つ、変わっていない。

私は、あの薄暗いむっとした部屋で毛布にくるまって震えながら、

彼女に嫉妬して、傷ついて、手ひどく傷つけ続けている。

地下鉄の階段を上がると、額に汗が滲んだ。立ち止まり、首筋にかかった髪を払う。

だいぶ暑い季節になってきた。講義が早い時間に終わる火曜日の、午後二時。

いつもなら夕方から行くバイトが休みになった今日は、ちょっとだけ非日常の気分だ。

駅前通りは土日ほどではないが、人が多いのは変わらない。

鬱陶しいキャッチをシカトして、早足で歩く雑踏。流行りのウエッジソール、ヒールのサンダルに白のスカート、水色のカットソー。どこにでもいる、みんなと同じ、平均的な女の子に見えるんだろう。そう考えると、不思議な気分になる。

誰だってそうだ。みんなと同じでありたい気持ちと、自分は自分でありたい気持ち同居しているのが、良くあるパターン。

それを見透かしていることに優越感さえ感じてしまう私は、認めたくないだけできつといちばん平均的な、そのパターンなんだろう。

通りに並ぶショップの路面店に立ち止まる。綺麗にコーディネートされた洋服を手取る。

その行動のひとつひとつが、まるで予定されたように流れていて、店先に漂うレゲエのリズムに、嘘でも少しだけ気分が高揚する。

歩道の端の駐輪スペースにある低い柵に腰掛けて人の流れを見ると

もなく、眺める。

人間観察、楽しいよねっと言ったら、りんちゃんは。人間にはあんまり興味がないの、と、返してくれたっけ。海を見ている方が、おもしろくはないけど、飽きないんだと言っていた。

最近、私はりんちゃんのことばかり思い出している。

りんちゃんと最後に会ってから、もう五年経った。

そろそろ時効なのかも知れない。そろそろ、私はちゃんと向き合わなくてはいけないのかも知れない。

りんちゃんはもう私のことなんて忘れてしまってるかも知れないけど、もし忘れていないとしたら私はりんちゃんに、ずっとつらい思いをさせ続けているのだから。

人の流れを見るのは楽しい。当たり前だけど、ひとりずつの人生を背負って生きてる。

派手な人、地味な人、早足の人、ゆつくりのひと、学生、会社員、おしゃれな人、そうでもない人、それぞれの舞台で、暮らして。集団に紛れて。ランク付けされて。自分を守って。

楽しくなったり、無理したり。笑ったり、落ち込んだり。それはとても興味深い。

こんなふうな漠然と思うことを、りんちゃんに伝えたんだったかは忘れてしまった。

同じこと、サキはどう思うかな？大学の友達は？

きっと聞かないけど、もしかしたらのときのために忘れないでとっておこう。

「北島」

ふいに呼ばれて、斜め四十五度を振り返った。

思ったより近くにいた声の主は、変わらないひよろつとした立ち姿。緑のＴシャツに、だぼだぼのジーパン。もとから茶色っぽかった髪は、もう少し色を抜いたのかも。

薄い胸板も猫背のシルエットも覚えていたとおりだけど、背はだいぶ伸びて、表情は大人びたような気がする。

「・・・海原」

「ういっす」

「なんで？」

「なんでって、買い物っす」

「そう」

「あー、今住んでるところがこっから近くで」

「そう、なんだ」

「歩いてたらなんか知ってるやつがいてびびった」

「私もだよ、びっくりした、こんなところで会うなんて」

笑う。私はちゃんと笑えている。そのことに、少し驚きさえした。

もっと戸惑うと思っていたのに。こんなに突然に、こんなに遠くで会うなんて、思ってもなかったのに。

「私がこのへんに住んでるって知ってた？」

「や、知らなかった、近いの」

「うーん、うん、電車で一時間とか」

「遠いじゃん」

「そうかも」

なんだそりゃ、と笑う。

笑うとき、少し目を伏せて口角を上げる癖も、そんなところだけ、本当に。変わらない。

「学校が、こっから二駅なんだ」

「ふーん、学校、短大だっけ」

「ううん、四大、それも知らなかったっけ」

「知らなかった」

「りんちゃんに、聞いたりとか」

「・・・りんちゃんは、そういう話はせん、ってか、りんちゃんも知らんと思うけど」

「・・・、そっか」

うん、と言った海原が少しだけ気まずそうにしたので、それで、なぜか、私は救われた気がした。

「海原は」

「服屋っす」

「今も、服、作ってるの」

「そうつすね」

専門学校を卒業したあとショップ店員のバイトをしながら、服を作っ  
て店に置かせてもらったり、デザインコンテストに応募したりし  
ているのだと言った。

「ねえ海原」

「なんすか」

「りんちゃんに会いたい」

海原は、心底意外そうな顔をした。

家に帰ると鍵が閉まっていた。  
鞆の中を探る。ドナルドダックのキーホルダーがなかなか見付から  
ない。

携帯のメモリ、ずっと知っていたひとの名前をあらためて登録する  
のは変な気持ちでした。

連絡する、と言ってしまったから、ずっと落ち着かない。

この街は、海が見えない。

私の部屋は日当たりはいいけど、見えるのはうちのベランダと、隣  
の家の庭だけだ。

カーテンの色が黄色く揺れている。

五限目が終わって、日の暮れかけるぎりぎりの時間。

窓辺に寄ってグラウンドの向こうに見えるのは、雲の多い空と今日  
の作業を終えた工事のクレーン車。

「ねえねえ、課題終わった？」

「明日の？」

「うっん、来週の月曜の」



「全然、週末にやろっかなあ」

「土日バイトなんだよ、どうしよう、今日帰って図書館行かんと、まだ参考文献も決めてないもん」

「学校の図書館は？」

「なんか、いい本なかったんだ」

「大丈夫、美紅ならなんとかなる」

「ううう」

苦笑い。いつもの私たちの会話。

「なんか、いつも同じような話ばっかしてるねえ」

はは、とアルトの声でサキが笑う。  
本当におもしろがっているのかは、わからない。  
急に知らない人が隣にいるような気分になって、私はどきっとした。  
いらいらする。なんでか、とても。

「・・・課題の話ばかりかも」

「うーん」

「なんか他の話しようよー」

「なになに」

自分から喋ってくれればいいのに。サキは話題を作らない。誰と話すときもそうだけど。

平気な顔をして、黙ったまま一緒にいる、をする。

なんて、なんて私は子どもっぽいんだろう。目を逸らして、沈黙した。しばし。

「だって、大学の友達にそんな重大な話しないしなあ」

ほんとうに小学生みたいなガキっぽい意地悪で。軽く言った一言、のつもりだった。

口に出してしまってから、しまった、と思った。

じんと唇が痺れるようになって、机の端に手をついた。

誰かが出したままにしていた椅子に、そのまま座る。

なーんてね、とか、でもサキは違うよ、とかフォローした方がいいのかも知れないと思ったけど、私は何も言わずに、何も言えずに、その瞬間を諦めかけた。

いつのまにか、教室には私たち二人と、ドアのあたりで固まって喋っている女の子二、三人しかいなくなっている。

曇り空。雨が降りそうで振らない天気。

重く湿った雲は、あの街を思い出す。

蛍光灯の白色がしらじらしい。私は泣きたくなくなるような気分で、暗い空を見上げた。

サキが立ち上がって、椅子に横向きに座っていた私の前に立つ。

少し見上げたところに、サキのジーンパンのウエストあたり。

腕と顔のラインの細さに比べたら下半身がぼっちゃりしているサキ

は、だけどとてもバランスのとれたきれいな身体をしていると思う。  
サキのふともものあたりに、視線を移した。

「みく、それは失礼だ。私はこんなだから、自分から話すのは苦手だから、だけど美紅が話したいことあったらちゃんと聞くし、言ってくれたらちゃんと話すよ？そんなふうに言われたら、傷つく」

ごめん、と私は言った。ごめんなさい。

その言葉は驚くほど素直に、声になった。

ごめんなさい。サキ。ごめん。

もう、これ以上、私のくだらない意地っ張りやプライドの高さで、誰か傷付けるなんてごめんだった。

悔しいからって「好き」を「嫌い」に無理矢理変えて、いいことなんてなかった。

いい加減に捨てなきゃいけないと思い続けて、やっと少しだけ、振り払えた気がした。

だけど、ほんとうに、本当に私は何も変わっちゃいなかった。

自分を好き、とか嫌い、とか考えること自体、自意識のうちだと思っていたけど、今の自分は間違いなく大嫌いだ。

私の未来には、海は要らないと思っていた。

彼女が時折口ずさんだ、タイトルも聞かなかった古い歌と同じように。

だけど、暗い海。曇り空。その切れ間からりと海上に射す光。

それはほんとうに彼女によく似合う、弱々しくてまっすぐな光。

私には、届かない。

私には、海がない。

あそこから逃げてきた私は、あの暗い海を、いつも曇っていた春の海を、凪いだ夏の海を、重く寒い冬の海を、私にはりんちゃんや海原みたく、ちゃんと見つめているだけの度量はなかった、それだけの、私のせいだけのことなのに。

ごめんなさい。サキの目が少し赤く染まっていた。

外はもう真っ暗になって、今から急いで帰ったって市立図書館はとつくに閉まっちゃっているだろうし、学校の図書館ももうすぐ閉まるだろうけど、時計のないこの教室では正確な時間はわからないけど、二つ離れた場所に置いた鞆からケイタイを取り出す気力が出なくて、私たちは沈黙した。

さつきよりももっともつと痛くて、怖い沈黙。ドアのところで喋っていた人たちもいなくなっていて、一本切れかけた蛍光灯がじじ、と弱い音を立てた。

ごめんなさい、と私はもう一度言った。

「・・・うん、もう許した」

「ごめんなさい」

「うん」

「ごめん」

「うん」

「・・・」

「・・・」

今度の沈黙は、あまり怖くなかった。

サキはその小柄な身体でともしっかりと立っていて、悔しいけれど私は甘えてしまう。

それは、とても自然な感情のように思えた。

「・・・なんか、お腹減ったな」

「ミスドでも行きますか」

「いいよ」

平日の夜のミスドは、仕事帰りっぽい人たちがお持ち帰りのドーナツを買うので混んでいて、レジでしばらく待たされた。

おかわり自由のアイスカフェオレとオールドファッションを注文して、先に席に着く。

向かいの席に、当たり前のように、サキが座る。

黄色いトレイの上にはカフェオレと、オールドファッション。

「あ」

「ん」

「同じもん頼んでる」

「おっ、お嬢さんお揃いですねえ」

珍しくおどけた口調に、私は笑った。

一緒になって照れるように笑ったサキの顔を、久しぶりにちゃんと見た気がする。

向かい合って座った誰かの顔を、久しぶりにちゃんと見た気がする。

サキに、りんちゃんのことを話した。

ひきこもりだった二年と半分の、りんちゃんも知らない私のこともサキは何も助言めいたことも慰めも言わなかったけれど、ただ、うん、うん、としっかりと目を合わせて、頷いて聞いてくれた。

泣きそうだったけれど、私は泣かなかった。

聞いてくれてありがとう、の一言は、帰り際の電車に乗るぎりぎりになって、やっと言えた。

サキはまじめな顔をして、うん、こちらこそ、と言った。

人の流れに混ざって振り返らずに電車に乗って、窓際の席に滑り込んだら、じわっと涙が出た。

街の夜景に頬杖をついたまま、海原と会ったときのことを思い返してみた。

好きだった、ひと。

だけどガタガタの木の机が並ぶ教室で、彼の姿を見るたびに感じていた焦がれるような感情は、どうやらもう起こらなくなっていた。

あこのころ海原を見るたびに思ったのは、飄々とした表面の中に押し

込めきれない痛さや脆さ。

私はきつと、それに惹かれていた。りんちゃんに惹かれたのと、りんちゃんに嫉妬したのと、同じ理由で。

今は克服したのか、うまく外に出さない方法を身に着けたのか。

それとも、あの頃壊れそうに思っていた彼へのイメージは、ただ私の思い込みや理想だったのかも知れない。

二件もらった番号の、片方、メモリに入れられなくてメモだけ持っていたぶん。

番号を押していく。海原のことだから伝え忘れられてるかもしれないけど。

どっちにしろ緊張はとけそうにない。心臓が速い。

ぷっぷっぷっ、という音で、コール音を待つ。

受話音量を上げていたせいか電波の悪いせいか、ざらざらした音が耳につく。

「はい」

「・・・、りんちゃん？」

「美紅」

「ひさし、ぶり」

「うん、」

りんちゃんの声。実感がない。  
五年ぶり。そんな久しぶりに思えないような、ずっと懐かしいような。

りんちゃんのことについて海原からほとんど何も聞かなかった私は、電波の向こうのそこがどこなのかわからないのだけど、りんちゃんの部屋の窓から見える工場地帯と海と、フローリングと薄い水色のベッドカバーを思い浮かべた。

「イッタに聞いてた」

「あ、そうなんだ」

「うん、電話くるかもって言ってた」

「そう、こないだ会ったの、偶然」

「美紅」

「うん」

「私も、会いたいけど」

「うん」

「美紅は、大丈夫なの」

目を閉じる。

りんちゃんの背後から海の音が聞こえるかと思って耳を澄ましてみたけれど、その向こうにはただかすかな息づかいと、さらさらと電



話の雑音が流れるだけだった。

「大丈夫じゃない」

「うん」

「かもしれないけど」

「うん」

「やっぱり会いたいな、りんちゃんに」

苦笑いのように、少しだけ笑った。

わかった、と、言ったりんちゃんの声は笑っていなくて、少しだけ上擦っていたような気がした。

怖いのは、私だけじゃない。

急ぎの用事でもないのに日時をもう決めてしまったのは、勇気がしぼまないうちに。

じゃあね、と電話を切ると同じぐらいに、部屋のドアがノックされた。

「美紅、ごはん」

すぐ行く、と母に応えた自分の声が自分のものじゃないみたいに、頭がぼうつとなって遠く聞こえた。

だけど、私はその決心が鈍らないうちに階段を降りて、食卓に座って、母の作った麻婆豆腐と大根のサラダを食べる。

黒いテーブルの縁の色が剥げかけている。

「お母さん、テーブルはげてる」

「ほんとだ、マッキーで塗ったところか」

「ありえないありえない」

笑う。母と私。

父は座イスでテレビを見ながら、いつのまにかいびきをかいている。まったく、と、母が苦笑する。

「お父さん、帰ってくるなりさつさとお風呂入ってご飯食べちゃって、いつのまにかあれよ」

なーんか年取っちゃったんだから、とため息をつく。

母ももういい年だけれど、私にはいつまでもただ、母で、小さい頃のイメージなのか、あまり変わらなく見える。

父と母は仲がいい。二人で豪快に笑う声を聞くことが減った気がするのは、きつとお互いの仕事の都合で、昔より一緒にいる時間が少なくなっただけだろう。

私の中で、故郷の海はいつもどんよりと曇っていた。

けれど今、電車の窓を流れる景色は晴れていて、海も遠くにきらきらと水面を反射している。

日差しが強くて、木々の影が濃い。

一両の電車、改札しかない駅に若い駅員さんが立っている。会釈をすると、敬礼を返してくれた。

前はもつと年のいった人がいた気がするけど、その人の息子さんだろうか。

古びた駅舎は、思いがけず新鮮な感じがした。

海に近付くにつれて、早足になる。

どんどん胸が波打って立ち止まる。呼吸が速くなっている。落ち着けて、ゆっくり。

歩く。待ち合わせの時間にはまだ早くて、私は堤防に座って海を見た。

海面を映す太陽が、海に向かうとまっすぐ目に入る。眩しくて、視線を逸らした。

堤防のすぐ後ろはアスファルトの道路、私が住んでいた家は改築されて、間口の開いた食堂のようになっていた。やっぱり、工場のお昼休みには混むのだろう。

ふと太陽の残像の残る目が、向こうから歩いてくる、細い影をとらえた。

テトラポットの上をたどってふわふわと漂ってきた彼女は、メートル手前で立ち止まった。

「久しぶり」

「うん、久しぶり」

声が掠れたのはお互い様で、だけど二人とも笑わずに。  
りんちゃんは私の隣に座り込んだ。

まつすぐの黒髪が肩の下まで伸びている。ワンピース。細い脚。  
変わらないようで、やっぱり、大人っぽくなったように。

「五年ぶり、だね、りんちゃん」

「うそ」

「え？」

「五年じゃない」

「・・・」

「覚えてないならいいよ」

拗ねたように言って、口を尖らせるようにして笑う。  
そういえば、りんちゃんはこんな剽軽な表情もするんだったな、と  
思ったら、気持ちが解けた気がした。

「あ」

思い出したのは、白くくすんだアスファルトの足下。  
灰色の毛布の隙間から見た、内股気味の靴もと。

「叶ったんじゃない？」

美紅、またね、と言ってくれたんだった。

「ありがとう、会いに来てくれて」

ありがとう、会ってくれて。そう言った。

小さな声で海の方を向いたまま、呟くように言ったから、ふと確かめるように隣を見た。

私は、泣くかも知れないと思っていた。緊張か、懐かしさ、苦しさ、そんなものに襲われて。

だけど、横目で見たら体育座りで膝を抱えた彼女の姿に、涙も苦しい気持ちも飛んでしまった。

「私、泣くかと思ってたのに」

「うん」

「先に泣かれちゃったらなあ」

伏し目がちに長い睫毛の先からぼろぼろと水滴を落としながら、りんちゃん泣き笑いの顔をした。

夕方まで、海にいた。言葉は交わしたり、途切れたり。

閉じこもっていた部屋でのことは、りんちゃんには話さなかった。その代わり、海原と会った日に考えていたことを、伝えてみた。

「なんか、前にもそんなこと言ってた気がする」

「話したっけ」

「わかんないけど」

「そうかもね、なんか進歩ないなあ、私」

そんなことない、お互い様だよ、とりんちゃんが言って、私たちは久しぶりに、顔を見合わせて笑った。

これは、実に五年ぶり。

そう言ったら、しつこい、と突っ込まれた。

夕焼けに少し涼しい風が腕を撫でて、立ち上がる。

工場の労働時間が終わったのか、後ろの道路を車と自転車が何台も通り過ぎる。

視線の端でお姉さんの暖簾が揺れて、私はまた海の方へ向き、目を細めてりんちゃんの隣で、深く息を吸った。

了

## 紅の未来（後書き）

【登場人物】

しおひら りんね

潮平 輪廻

かいばら いった

海原 一太

きたしま みく

北島 美紅

\* \* \*

三部作完結です。

りんちゃんかどのような進路を進んだのかは永遠の謎です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9176s/>

---

海の夢

2011年10月9日00時50分発行